

『街の女マギー』と自然主義

中 村 正 廣

スティーヴン・クレインは1893年 *Maggie: A Girl of the Streets* (以下『マギー』)⁽¹⁾を自費出版している。ピクトリア王朝風のジェンティール・トラディションの雰囲気にも包まれた当時のアメリカで、街の女に転落自殺していく女の一生を描いたこの作品の出版を引き受けてくれる業者があるはずもなかったが、ハムリン・ガーランドに『マギー』を贈呈した際クレインは次のような献辞を書き送っている。

It is inevitable that you will be greatly shocked by this book but continue please with all possible courage to the end. For it tries to show that environment is a tremendous thing in the world and frequently shapes lives regardless. If one proves that theory one makes room in Heaven for all sorts of souls (notably an occasional street girl) who are not confidently expected to be there by many excellent people.⁽²⁾

「環境は恐るべき力をもつ」という言葉は、ニューヨークのスラム街バワリーを背景に描いたこの作品が自然主義の影響を受けた可能性を示唆しているが、クレインのこの言葉を額面通りに受け取る批評家は少ない。クレインの『マギー』とゾラの『居酒屋』との類似点を幾つか挙げ、マギーを「環境と弱い性格」の犠牲者としている批評家もあるが、⁽³⁾ゾラの客観的写実による描写とクレインの印象主義的描写の間には余りにも大きな隔りがある。

『マギー』の幕開けとなる第1章～第4章にはすさんだ環境に生きる人間の精神的貧しさが見られる。人間は動物や物のレベルで把握され、建物は擬人化され、スラムの環境の劣悪さと人間の主体性の無さが強烈なイメージで読者の脳裏に刻まれる。だが『マギー』は展開するにつれ環境の凄まじい力の描写を離れ、人間の無責任、偽善に対する辛辣な批判が顕著となる。環境を形而下のものと捉え、クレインの自然主義的な面を肯定するドナルド・パイザーですら、クレインの主眼が環境の影響を立証することにはなく、見せかけの道德とリアリティを区別し社会の自己偽瞞や皮相的道德を攻撃することにあつたと解釈せざるを得ない。⁽⁴⁾

だが環境が人間に与える影響にクレインが大きな関心を寄せていたことも明白な事実である。自然主義的要素の考察は無意味で非生産的であるという声が聞かれるが、⁽⁵⁾クレインが『マギー』の中で決定論、即ち人間の自由意志を否定し、人間を環境や遺伝によって支配された卑小な存在と見なす態度を意識して書いた部分を積極的に評価することも必要であろう。この作品を自然主義作品だと主張するつもりは毛頭ないが、決定論とは全く無関係の表面的リアリズム⁽⁶⁾として片付けるには問題がある。クレインは決して「スラムという自然主義的要素を取り上げたばかりに

初期自然主義作家という、望みもしなかったレッテルを貼られた」⁽⁷⁾のではない。かといって「人生を悲劇的に眺め、人生における醜惡な面をも大胆に取り上げたゾラの作家としてのまやかしの態度の中にその文学的良心を認め、それに共鳴したことを意味すると同時に、現実をライフサイズに模写しようとするゾラの手法を拒否した」⁽⁸⁾わけでもない。クレインには「人生を悲劇的に眺める」決定論的イデオロギーを作家の理念としていただくには余りにも透徹した眼識があるように思われる。事実の細部が自分の血でいったん濾過されて自分の作品は生まれるとウィラ・キャザーに語ったクレインが、決定論をいかに『マギー』の中に昇華して表現しているのかを本稿では考察したい。

1

マギーに関する人物描写はほとんど見られない。容姿は美しいと書かれているが、髪がクレイン好みの金髪なのか、それとも黒髪なのかすら我々読者には知らされない。また積極的な性格描写もない。カラーとカフスの工場に働きに出たのも、兄ジミーから働くか街の女になるかの二者択一を迫られ、後者に「女性特有の反感」(p. 16)をもったからであり、家出してピートのもとに走ったのも悲惨な家庭と工場からの逃避ゆえであった。街の女になり果て自殺するに至ったのも、ピートに捨てられ母メアリーと兄ジミーに拒絶されたからであった。このようにマギーは外からの刺激にそのまま無垢に反応するだけで内発的行動は一切とらない。

マギーはスラム街のありとあらゆる罪にさらされてきた。アルコール中毒、窃盗、暴力、偽善、イカサマ。これらに染まっているはずの彼女は終始世間知らずの、夢見る女性として描かれる。彼女は「どぶに咲いた花」(p. 16)であり、恐らく入水自殺をしたときですら他の三人と同じ次元まで墮落はしていなかっただろうと誰しもが思うのである。しかし決定論的イデオロギーに基づいて書かれた作品ならば、彼女は落ちぶれてなす術もなく、自由意志を失った無力な存在となるはずだが、ところがマギーは自殺する。自殺は程度の差こそあれ、自由意志によるものであり、入水自殺直前のマギーを描いたくだりでは、彼女が誘いを掛ける客の質の低下によって彼女の転落が暗示されているとはいえ、その行為は彼女の心理的・道徳的葛藤の結果としか考えられない。ネリーは同じ街の女でありながら男を騙しながら力強く生きているのだ。加えて、決定論的観点からすれば、他の三人も環境の犠牲者であり、マギー同様彼らもクレインによって許されてしかるべきなのだ。しかしクレインは現実にはマギーだけを許している。

マギーはこの作品において中心的役割を担っている。作品構成の点からもマギーの誘惑が作品の中間で起こり、前半がそこに至る動因、後半がその結果を描いていることを考慮すれば、⁽⁹⁾マギーが中心的存在であることに異論をはさむ余地はない。だがマギーを他の三人と一緒に並べ、四人の中でどの人物が最も生き生きとして描かれているかを考えてみると、マギー以外の三人のいずれもが我々読者には否定的であれ興味深い存在として浮かび上がってくる。ではこの三人についてはクレインはどのように描いているだろうか。実は三人の描写展開においてクレインが決定論

的現実認識に関心をもっていることはいたるところで散見される。彼らが自らの不遇を環境のせいに行っているという事実を三人の描写を通してクレインは繰り返し分析している。マギーがこの三人の犠牲者であることは誰の目にも明らかであり、その意味では彼女の運命も間接的ながら環境によって決定されたと言ってよい。さらに彼女を悪に染めなかった環境こそが彼女を現実から逃避させ、ピートのもとに走らせたとも言えるのだ。このように考えてくるとマギーの人生すら環境に支配されたと言えるのである。

問題は決定論的現実認識がクレインの創作姿勢にではなく三人の登場人物の思考判断の中に反映されていることである。クレインは人間の運命を決定する環境の力を三人の見るがままに描きだし、クレイン自身の目と衝突させているのだ。『マギー』は、さしづめ決定論的なイデオロギーに基づいて書かれたように「見える」「見せる」と言うべきか）主人公マギーの変容を核にしなが、実はマギーを犠牲にした三人が見せる決定論的な現実認識をクレインが距離を置いて描いた作品と言えるのである。社会改革が叫ばれる中でクレインがスラムの生活者の一人となって観察した、スラム街の人々の臆病と彼らの決定論的な現実認識に対する彼の反応を無視することは『マギー』の本質的一面を見逃すことになる。以下マギーの恋人ピート、マギーの母メアリー、マギーの兄ジミーについて順を追って考察していきたい。

2

物語は一人の「とても小さな少年」がラム街の「名誉」を守ろうとして砂利山に立ち悪魔通りの子供に石を投げているところで幕をあける。クレインはたかが子供のケンカを故意に仰々しくギリシアの勇士の描写に用いるような言葉を駆使しながら描きだし、子供の認識と現実のズレを表現している。暫くあってピートの登場となる。

Down the avenue came boastfully sauntering a lad of sixteen years, although the chronic sneer of an ideal manhood *already* sat upon his lips. His hat was tipped with an air of challenge over his eye. Between his teeth, a cigar stump was tilted at the angle of defiance. He walked with a certain swing of the shoulders which appalled the timid. He glanced over into the vacant lot in which the little raving boys from Devil's Row seethed about the shrieking and tearful child from Rum Alley. (p. 4. イタリック体は筆者)

この後ピート、メアリー、ジミーの三人を形容して幾度となく使用される社会への「冷笑」が16歳にして「既に」ピートの身についているということであるから、それは遅かれ早かれニューヨークの貧民窟に生きる者には出てくる特徴といえる。ピートはその冷笑を身につけることこそ理想的な男性だと考えるが、マギーが後にピートの冷笑に「理想的男性像」を見るに至ることを考

えると、冷笑はそこに生きる人々の精一杯の抵抗なのかもしれない。行く手を阻む者に挑戦し力でねじふせんと言わんばかりの格好はそこに生きる者には必要な策なのだ。

ところで何故ピートは冷笑するようになってしまったのか、ピートの思考を覗いてみよう。ピートがマギーと連れ立って行く動物園で、彼は一匹の小猿にうっとりするほどひかれる。

Once at the Menagerie he went into a trance of admiration before the spectacle of a very small monkey threatening to thrash a cageful because one of them had pulled his tail and he had not wheeled about quickly enough to discover who did it. Ever after Pete knew that monkey by sight and winked at him, trying to induce him to fight with other and larger monkeys. (p. 26)

自分の尾を引っ張った相手もわからず、ただやみくもに檻の中の猿全部に体をぶつけていく小猿に、ピートは社会の中の彼自身の姿を重ね合わせて見ている。『赤い武勲章』の中でヘンリーが逃走した後に合流した兵士たちの怒りは「よく見えぬ原因」(Norton 版, p. 45)¹⁰に向けられ、死にかかった兵士は「見えざるもの」(Norton 版, p. 45)を見据える。ヘンリーの苛立ちも「漠然とした原因」(Norton 版, p. 55)のせいなのだ。ピートの中にこのようなヘンリーたちの思いを重ねて見るのは難しくない。またピートの場合小猿にもっと大きな猿に挑んでほしいという他力本願的自己投影は、自分の力では太刀打ちできない環境への苛立ちを反映していると言ってもよい。ところが、ピートは自分より強大な力の前に後ずさりしながら、自分に許容されたところで勇士のごとく振る舞っているのである。事実彼の「拳」に恐れを抱くのは「臆病者」のみなのだ。マギーをうっとりさせる外見のきらびやかさも無頓着さも虚勢にすぎない。

この彼が人をなじるときもほめるときも、挑戦するときも、そして驚くときもよく使う言葉がある。それは“what deh hell”だが、マギーは困苦と屈辱の世の中で公然と世間に挑みかかる騎士のたくましさをこの言葉に感じる。

When he said, “Ah, what deh hell,” his voice was burdened with disdain for the inevitable and contempt for anything that fate might compel him to endure. (p. 19)

ピートは自分のまわりで起きること、例えば不快なこと、驚きを与えるものすべてが「避けられないもの」であり、「運命」であると思っているのである。そう言えば、ヘンリーも集団の中で流され無惨に殺されることを幾度となく「運命」と呼んでいた。

ピートの虚勢と実像の間のギャップはマギーの夢と絡ませて展開されていく。マギーは終始ピートの建前の顔の背後にロマンチックな夢を見、ピート自身もマギーを鏡として自分の英姿に酔いしれているが、7章、12章、14章、18章に出てくるホールの場面はこの二人が背を向けている現実をはっきり描いている。ピートは紳士のようにマギーに振る舞い、給仕や回りの者には攻撃

的に対応するが、しかしこのホールはすべて下品であるばかりか、次第に品位を落としていく。また客も給仕も（ピート自身はバーテンであり、彼が働く店はイミテーション、模造品で占められている。pp. 33—34 の辺りを参照）低い地位の、押さえられた階級の人々なのである。「もろびとこぞりて」の歌声の聞こえる教会の窓の下で雪風の中気を失いかけた放浪者に、観客は「深遠なリアリズム」を見、「喜びはいつも中にあり、自分たちは役者と同じく外側にいるしかない」（p. 27）と考え、恍惚としているのだ。このような社会の敗者集団の一人となって、劇の中のヒーローが様々な妨害や苦難を乗り越え悪を退治しヒロインを救出する筋書にピートはうっとりする。

マギーとピートの関係は彼女の家出後三週間後には早くも悲劇を迎える。ピートの虚飾を写し出す鏡の機能を果たしていたマギーも華美な女性ネリーの登場で色褪せてしまい、ネリーに嘲笑されたピートは誰もが重宝している社会での体面からマギーを捨てるのである。これを正当化するため黙考を重ね、マギーが家出したのは当然だとして弱い立場のマギーへの環境の力を認めつつ、その母と兄が自分を陥れようとしているとの結論を導き出す。現状の責任を自分の外に求める人間のピートは、またしてもマギーの破滅の原因を自分の外、即ちマギーの母と兄、ひいては社会全般にまで広げて求めるのである。

If he had thought that her soul could never smile again, he would have believed the mother and brother, who were pyrotechnic over the affair, to be responsible for it.

Besides, in his world, souls did not insist upon being able to smile. “What deh hell?” (p. 49. イタリック体は筆者)

第18章は泥酔したピートの憐れな姿を描きだしているが、街の女に囲まれた彼は次のような文句を幾度となく繰り返している。

Don’ try pull man’s leg, but have a heluva time! Das right! Das way teh do! Now, if I sawght yehs tryin’ work me fer drinks, wouldn’ buy damn t’ing! But yer right sort, damn it! Yehs know how ter treat a f’ler, an’ I stays by yehs ’til spen’ las’ cent! Das right! I’m good f’ler an’ I knows when an’body treats me right! (p. 54)

彼が動物園で見た小猿は自分の尾を引っ張られて他の仲間に挑んでいった。ピートは自分もそうだと思い込んでいる。ところが自分を「公明正大に」扱わない者には挑んでいくと言いながら、この場面では街の女たちに軽くあしらわれ、給仕には嘲笑されているのである。現状を他人のせいにすることに拘泥するがあまり、彼は現実と幻影の区別すらできなくなっている。保身のためにのみ生きてきたピートは弱肉強食の世界に於いて相応の報いを受けているのだ。ダー

ウィニズムの世界を信じたピートがダーウィニズム的な結末を与えられるという皮肉な結末を迎えているのである。⁽¹¹⁾

しかし我々読者のピートへの反応には共感は伴わない。街の女に媚を売る彼をクレインは次のように描いている。

His countenance shone with the true spirit of benevolence. He was in the proper mode of missionaries. He would have fraternized with obscure Hottentots. (p. 54)

この描写はマギーが売春婦に身を持ち崩す前に出会う牧師のそれと重なり合っている。

His beaming, chubby face was a picture of benevolence and kindheartedness.
His eyes shone good-will. (p. 51)

またピートのこの作品での最後の描写,

The smell of oil, stifling in its intensity, pervaded the air. The wine from an overturned glass dripped softly down upon the blotches on the man's neck. (p. 56)

は、マギーが17章の下町の間で会った「吹き出物だらけの男」を想起させることは批評家が指摘するところだが、⁽¹²⁾ しかし売春婦に身を持ち崩したマギーが自殺する前に出会う浮浪者の描写とも重なっている。

When almost to the river the girl saw a great figure. On going forward she perceived it to be a huge fat man in torn and greasy garments. His grey hair straggled down over his forehead.... He laughed, his brown, disordered teeth gleaming under a grey, grizzled moustache from which beerdrops dripped. (p. 53)

マギーが以前ピートを「大きい」と見ていたこと、そしてピートが「油を塗った切り下げ前髪を額に垂れ下げていたこと」(p. 17) を考えてみれば、この男はピートの成れの果てであろう。慈悲心に満ちた顔をしながら、疫病から後ずさりするようにマギーを拒絶する牧師、そしてマギーが人間としてこれ以上自分を墮落させられないと思ったであろう酔っ払いの浮浪者、この二人とピートをクレインは意識的にだぶらせ、マギーが自殺するに至る場面の最後にピートを登場させることで、彼がマギーの墮落に決定的にかんだことをクレインは明示したのである。

ではメアリーの場合はどうか。この人物も17章の自殺の場面に登場こそしないが、その場に存在しているかのように描かれている。先程吹き出物がピートを想起させると述べたが、これに関してはメアリーも同様で、p. 32に「吹き出物の多い腕」と描写されている。加えてマギーは17章で時間に遅れた男から「やあ、メアリー。すまんね。しゃんとしなよ、おばさん」(p. 52)と声をかけられる。これは偶然ではなく象徴的な響きをもっていると考えられる。即ち、マギー自身がメアリーのようになりつつあるのではないかということであり、これがマギーに自殺を暗示する一因となっているのである。

メアリーは大酒飲みであり、夫婦喧嘩では夫をやり込め、腕白坊主のジミーの歯がカチカチ鳴るまで怒鳴りつけ、すぐさまその後で「かわいそうな母ちゃん」(p. 9)と子供たちの前でこぼしてみせる。自分は家具という家具、道具という道具を蹴り、殴り倒しながら、マギーが皿一枚でも割ったりすると「こんちくしょう」(p. 9)と吠えたて、また喧嘩をしたジミーを叱責する。不満たらたらで眉も首も黄色く（黄色はこの作品の中では赤と黒に次いで多く出てくる色で、住民の不満不快を表している¹³⁾）、顔は酒で真赤にふくれ上がっている。自分の不遇を環境のせいにし、自分の非を言い逃れるためには自分の娘を42人も売春婦にしてしまうような人物だが、今我々にとって大事なのはメアリーが自らを環境の犠牲者と思い込んでいるという事実である。

It seems that the world had treated this woman very badly, and she took a deep revenge upon such portions of it as came within her reach. She broke furniture as if she were at last getting her rights. She swelled with virtuous indignation as she carried the lighter articles of household use, one by one under the shadows of the three gilt balls, where Hebrews chained them with chains of interest. (p. 26. イタリック体は筆者)

クレインがピートのときよりもメアリーを突き放して見ていることはイタリック体の部分からも明らかだ。スラム街で数十年も生きたメアリーに関して、ピートのように現況を正当化させることはクレインにとってはほぼ不可能に近いことであった。彼女の“what deh hell”は、彼女を現在の悲惨な状態に陥れた不可視の力に敵意をもって向けられているのではなく、自分の感情と言動以外のものすべてを否定することに使われているだけなのである。

自分の不遇、不幸を夫、息子、社会のせいにする憤懣やる方ないメアリーは娘マギーの墮落、自殺を誰のせいにもせず、悪の根源をマギーに見だし、すべての責任をマギー個人の中に求める。

Ah, who would t'ink such a bad girl could grow up in our fambly, Jimmie, me son.

Many deh hour I've spent in talk wid dat girl an' tol' her if she ever went on deh streets I'd see her damned. An' after all her bringin' up an' what I tol' her and talked wid her, she goes teh deh bad, like a duck teh water. (p. 32)

メアリーが自分の境遇をとらえる論理に従えば、「ウチ」で「大きくなれ」ば、「カモが水辺へひかれるように」「墮落する」のが当たり前のはずだが、自分以外に関してはこの論理は通用しない。自分は酔っ払って警官にからみ、近所の子供たちにはなじられ、裁判所には幾度となく出頭する身でありながら、ピートに誘惑されたマギーを「我が家の恥さらし」(p. 30)と非難、「永遠に呪われてしまえばいいんだ。飲まず食わずでいるといいんだ。どぶの中で眠り、太陽を再び拝まのようにしておくれ」(p. 32)と神に祈るのだ。彼女の非望する「立派な家庭」以上に悲惨な「どぶ」がないということすら、彼女の意識には上らない。

マギーの死を知らされたメアリーは自分の体面がマギーによって傷つけられたことが許せない。弔問に現れた婦人は「教会譲り」の言葉を使って次のようにメアリーを説得する。

Yer poor misguided chil' is gone now, Mary, an' let us hope it's fer deh bes'.
Yeh'll fergive her now, Mary, won't yehs, dear, all her disobed'ence? All her
t'ankless behavior to her mudder an' all her badness? She's gone where her ter'ble
sins will be judged. (p. 57)

この後ようやくメアリーはマギーを許すのであるが、外見的な差こそあれ、メアリーは飢えに苦しむ人々の前で、人々の墮落を諭す教会の牧師（その牧師の説教は“yehs”からなっていた、つまり牧師は説教の対象からはずれていたとクレインは注釈している）、マギーが求める救いの手を拒否する牧師と変わらない。そして自らが「立派な」家庭という幻影の中にいることすら意識に上らない点ではメアリーはピートと全く同じなのである。

4

ピートとメアリーの思考及び行動に見られる責任転嫁と似非道徳はクレインにとってアイロニーの対象でしかない。ではクレインは環境が人間に与える影響というものを過小評価しているのだろうか。このことを考察する場合、まずピートがスラム街でほぼ変貌を遂げた人物であり、メアリーが完全にスラム街に埋もれた人物であることを我々は忘れてはならない。彼らは偽善と自己防衛の殻に収まり、クレインの共感をひくことはない。

だが、マギーと同様環境の中で変貌していくジミーを見る作者の目は二人の場合とは違っている。例えば第1章でジミーはラム通りの「名誉」を守るため血に染まりながらも孤軍奮闘する。クレインによって意識的に人間の闘争本能が生々しく、そしてアイロニカルに描かれている場面

とはいえ、大人たちの無気力な受動的な生活実態と並置されていることを考えれば、ジミーの行動は積極的に評価されてよい。またジミーは隣人の老婆に頼まれたビールを買っての帰り、父親が力づくでそれを奪わんとしたとき、「やめてくれ。このビール婆さんのだい。それを横取りするなんて汚えじゃないか」(p. 11) と食ってかかるだけの正義感を持ちあわせている。

ジミーがその名誉を守るために奮闘したラム小路は「暗い」界限にある。人間の重みでぎしぎし鳴る建物は「ぞっとするような」戸口を持ち、そこから通りやどぶに子供たちが吐き出される。秋風に黄色い埃がまき上げられ、窓に吹きつけられている。洗濯物が非常階段になびき、バケツ、箒、ぼろ切れ、瓶などがいたるところ狭しと置かれている。ホルトンが指摘しているように、⁽¹⁴⁾『マギー』の前半はほとんど作中人物の視点から描写されているが、ジミーの体験が彼の意識に与える影響は他の三人より詳細に述べられている。ジミーが「ぞっと」思う生活空間はアパートの外だけに終わらない。彼の家庭はアパートの外以上にすさんでおり、そこでは彼は攻撃して身を守ることにすら許されず、ただ脅えるばかりだ。

ジミーの意識への環境の影響は、クレインの無慈悲なまでの客観的描写（例えば「赤ん坊のトミーは死んだ……マギーとジミーは生きた」などがその例）に見られるダーウィニズム的要素⁽¹⁵⁾によって補強され、弱肉強食の世界に生きるジミーの変容を当然のものとして呈示する。

The inexperienced fibres of the boy's eyes were hardened at an early age. He became a young man of leather. He lived some red years without laboring. During that time his sneer became chronic. *He studied human nature in the gutter, and found it no worse than he thought he had reason to believe it. He never conceived a respect for the world, because he had begun with no idols that it had smashed.* (p. 13. イタリック体は筆者)

酒をあおる毎日のジミーの冷笑はひどくなり、身の回りのものすべてに向けられるようになる。荷馬車の御者席の王座に身を置き、優越感にひたりながら、一方では被害者意識が強くなり、街で起こることをすべて警察は自分のせいにすると感じ、通行人はこっちの都合を考えない小うるさいハエと考える。人に踏みつけにされても孤立した立場をとることにこそ栄光があると自分を納得させる。そして世間のやつらが自分の足下につけこもうとするから、彼の方では自衛のため機会のあるごとにやむをえず喧嘩するのだと自分の行為を正当化する。『赤い武勲章』の中のヘンリーの苛立ちをクレインは「いらいらした動物、犬に悩まされた善意の牛」(Norton 版, p. 31) と表現したが、ジミーは自らを「アフリカの牛」に見立て市街電車を「どうしても離れようとしていない虫」(p. 15) に譬えてほくそえんでいる。

ではこのジミーはマギーの家出に対してどのような反応を示しているだろうか。孤高にある自分の家族の一員が環境の犠牲になることを想像だにできなかったジミーは、マギーの墮落にどのように対処していいか分からない。

Of course Jimmie publicly damned his sister that he might appear on a higher social plane. But, arguing with himself, stumbling about *in ways that he knew not*, he, once, almost came to a conclusion that *his sister would have been more firmly good had she better known why*. However, he felt that he could not hold such a view. He threw it hastily aside. (p. 42. イタリック体は筆者)

無意識的にではあれ、ジミーは自分と同様にマギーの墮落は環境のせいであり個人の責任ではないと考えるところまでいく。マギーへの人間味のある姿勢を窺わせるのであるが、しかしジミーの自己保身への執着と唯我独尊はマギーを切り捨てることで安泰を求めようとする。先程の引用の直前のくだりで、これまで複数の女性を同時に泣かせたことのあるジミーをクレインは次のように語っている。

Jimmie thought he had a great idea of women's frailty, but he could not understand why any of his kin should be victims.... Again he wondered *vaguely* if some of the women of his acquaintance had brothers. Nevertheless, his mind did not for an instant confuse himself with those brothers nor his sister with theirs. (p. 41. イタリック体は筆者)

ここで見逃してならないのは、環境に打ちひしがれ自由意志を剥奪された存在には生まれないであろう選択の余地が、わずかではあるが、ジミーには開けているという事実である。マギーの件でピートと渡り合った際残してきた友の救出に戻ろうとするものの諦めたり、またマギーの家出のときもマギーの人生に理解を示すところまで行きながら自分だけを守ろうとしたりするなど、いずれにせよジミーが自分の選択によって行動していることをクレインはつまびらかにしている。意志の介在の事実がジミーへの読者の共感を急速に減少させていることは歴然としている。

「偶像」すら持っていないはずのジミー、神すらも信じていないジミーが自分の行く手を何者にも阻ませないことが「摂理」だと主張し、そして神の戦車と一戦を交えんとするジミーが、馬車の群れをけちらして進む消防車を「犬のように忠実に」敬うのだ。馬上にいるときは警官を無視しながら、地上に立ったときは「消防車と同じ敬意」を警官に抱いているという事実は、表面上はともかくジミーがピートと同じ類の人間であることを物語っている。

このようなジミーがマギーを労ることができるはずがない。次はマギーを拒否するときのジミーの描写。

Radiant virtue sat upon his brow and his repelling hands expressed horror of contamination. (p. 48)

確かにジミーはピートやメアリーと違い変容する。そして二人の段階までは堕ちていない。しかし、この二人の場合と同様クレインは決定論的な現実認識をそこに確認しながらも、それが幻影の中に暮らす個人の正当化のため使用され、責任逃れとして悪用されている点から注意をそらさなかった。

5

環境と遺伝（勿論アメリカ自然主義は前者が中心）の力は巨大である。人間はそれに押し潰され、自由意志を持たぬ動物的次元にまでおとされる。そのような人間の状況を決定論的イデオロギーによって描こうとしたのが自然主義小説である。

しかし、『マギー』の世界は不条理の世界でも、また決定論的なイデオロギーに貫かれた世界でもない。人間の意志が否定され、神が理不尽に人間を扱う世界ではない。巨大な力を前にして彼らは皆幻影の中に逃避し、自ら意志を放棄し、意志の欠如が蔓延する流れの中に身をまかせて、自分ひとりの牙城を守ろうとしている。徳も親切も、そして神すらも人間が無力にしてしまったのだ。

クレインは決定論的イデオロギーに則って真実を提出するには余りにも他のことが見えすぎた。決定論によって立つ世界では、人間がとる行動は道徳的責任を問われない。なぜなら、人間の行動はその人間が自らの意志でとったものではないからである。クレインはそのような決定論的な現実認識の中に責任逃れを見たのである。このような観点からすれば、夢を見ながら破滅させられていくマギーの人生を「共謀の結果」¹⁰⁸と捉えても言い過ぎではない。そして頑ななまでのマギーの無知ぶりとロマンチックな性格を、恐らく、グロテスクなまでに決定論的現実認識に染まった世界の対極として、即ち、人間が失ってはならぬものとして、クレインは呈示したとも言える。

『マギー』の第一草稿は1891年の1月から6月、シラキュース大学の寮で書かれたと言われている。シラキュース大学の近くの赤線地帯や警察裁判所に出かけて、売春婦や犯罪者と接触、リアリスティックに『マギー』を書こうとしたのかもしれない。世間に蔓延している罪からクレインを隔離しようとした彼の両親が強調した世界とは違う真実の人生が「興味深い研究対象」としてクレインの目の前に現れたことは事実だ。ことごとく神の怒りと道徳を唱える両親への反抗、¹⁰⁹また、強大な力に押し潰される下層階級の人々への同情が相乗作用して、クレインのリアリズムを自然主義的なものに変化させた可能性は十分にある。タルミッジ牧師がその説教「地獄への入り口」の中で売春婦の行く末のひとつとして、イースト・リバーへの投身自殺を挙げているが、クレインはそれにかなりの関心を示したであろうし、同じくタルミッジの『獣』の中でのアルコールの怖さや、『都会生活の裏側』で挙げた改革の為の5項目（1.街の浄化 2.キリスト教的出版物の普及 3.学校教育の充実 4.貧困の一掃 5.神の福音の拡大）に対して魅力を感じたであろうことは想像するに難くない。¹¹⁰

しかし、パワリーの実体験が加わるにつれ、環境という巨大な力の前にひれ伏す人間の悲劇を

描くだけでは何か足らぬという意識がクレインには生まれた。貧しい人々が悲惨な環境におとされている姿に憐れみを感じ、貧困を傍観する社会に怒りを感じながらも、クレインはバワリーの人々の現実、即ち、人間としての誇りを捨てた彼らの臆病さ、貧困に甘んじて無気力に毎日を送ることを誇りとするような彼らの生き方に苛立ちを覚えた。このような人々を決定論的現実認識で描くにはクレインには余りにも人々の臆病さが見えすぎ、社会改革において人間の責任追及がなおざりにされやすいことに彼の目はいやが応にもいつてしまったのである。これがクレインのバワリーの人々への全幅の共感を弱め、彼に距離を置いた見方をさせたといえる。

キャサリン・ハリスへの手紙の中でクレインは『マギー』の意図について次のように述べている。

I do not think that much can be done with the Bowery as long as the [word blurred] are in their present state of conceit. A person who thinks himself superior to the rest of us because he has no job and no pride and no clean clothes is as badly conceited as Lillian Russell. In a story of mine called "An Experiment in Misery" I tried to make plain that the root of Bowery life is a sort of cowardice. Perhaps I mean a lack of ambition or to willingly be knocked flat and accept the licking.... I had no other purpose in writing "Maggie" than to show people to people as *they seem to me*. If that be evil, make the most of it.⁽¹⁾ (イタリック体は筆者)

ガーランドはリアリズムには一つの法則しかないとし、それは「客観的現実には忠実であることではなく、作家が見るがままの客観的現実には忠実であることだ」⁽²⁾だと言っている。しかしクレインの場合客観的事実と作家の主観との間の緊張はガーランド以上のものであった。この緊張は、結果的には環境の力をリアリスティックに描く際には一見相容れないと思われる印象主義的技法を生みださせるが、このようなクレインの対峙する外界への姿勢と認識は決定論的現実認識について考察する場合も看過してはならぬものだろう。クレインがどの程度まで自然主義理論に精通していたかは、筆者の知る限りどの批評家の見解も推察の域を出ていないが、直観的にではあれ、彼が決定論的現実認識を自分なりに理解しそれに反発を感じていたということに関しては疑いを挟む余地はない。

ウォルコットはすべての自然主義的小説は決定論とそのアンチテーゼのあいだの緊張の中に存在すると述べているが、⁽³⁾このような観点からいくと『マギー』も決定論的現実認識をテーマとして扱った自然主義的な作品の一つと呼べるかもしれない。

[註]

- (1) 『マギー』のテキストには1893年版（クレインが自費出版したもの）と1896年版（編集者の要請でクレインが加筆訂正したもの）が存在している。1969年ヴァージニア大学の Fredson Bowers が編集した「クレイン全

- 集」の出現によりテキストは更に一つ増えた。1893年版は長い間無視されてきたが、現在ではほとんどのテキストは1893年版に拠っている。本稿では1893年版をもとにした Stephen Crane, *Maggie: A Girl of the Streets* ed. Thomas Gullason (New York: W. W. Norton & Company, 1979) を使用、以下『マギー』に関する引用はすべてこのテキストに拠る。尚、『マギー』のテキストについては R. W. Stallman, "Stephen Crane's Revision of *Maggie: A Girl of the Streets*," *American Literature*, 26 (1955), 528—36, Hershel Parker and Brian Higgins, "Maggie's 'Last Night': Authorial Design and Editorial Patching," *Studies in the Novel*, 10 (1978), 64—75などが詳しく論じている。
- (2) Stephen Crane: *Letters*, ed. R. W. Stallman and Lillian Gilkes (New York: New York University Press, 1960), p. 14.
 - (3) Lars Åhnebrink, *The Beginnings of Naturalism in American Fiction* (Uppsala, Sweden: A. B. Lundequista Bokhandeln, 1950), pp. 250—264.
 - (4) Donald Pizer, *Realism & Naturalism in Nineteenth-Century American Literature* (New York: Russell & Russell, 1966), p. 130.
 - (5) 大井浩二 『アメリカ自然主義文学論』(研究社, 1973), pp. 35—36. 勿論大井氏の主張は「純粋な自然主義」をアメリカの作品の中に無理に見ようとしてアメリカの独自性を見失ってはならぬということにある。
 - (6) Marston LaFrance, *A Reading of Stephen Crane* (New York: Oxford University Press, 1971), p. 52.
 - (7) 高橋正雄 『アメリカ自然主義の形成—二十世紀アメリカ小説 I』(富山房, 1973), p. 58.
 - (8) 押谷善一郎 『スティーヴン・クレイン—評伝と研究』(山口書店, 1981), pp. 63—64.
 - (9) James Nagel, *Stephen Crane and Literary Impressionism* (London: The Pennsylvania State University Press, 1980), p. 129.
 - (10) Stephen Crane, *The Red Badge of Courage* eds. Sculley Bradley et al. (New York: W. W. Norton & Company, Inc., 1962).
 - (11) Malcolm Bradbury, "Sociology and Literary Studies, II. Romance and Reality in *Maggie*," *American Studies*, 3 (1969), 120.
 - (12) Joseph X. Brennan, "Ironie and Symbolic Structure in Crane's *Maggie*," in *Stephen Crane's Career* ed. Thomas A. Gullason (New York: New York University Press, 1972), p. 328.
 - (13) cf. Katherine G. Simoneaux, "Color Imagery in Crane's *Maggie: A Girl of the Streets*," *CLA Journal*, 18 (1974), 91—100.
 - (14) Milne Holton, "The Sparrow's Fall and the Sparrow's Eye: Crane's *Maggie*," *Studia Neophilologica*, 41 (1969), 119—122. ホルトンはジミーの感受性が環境に影響されていることに注目しながらも、クレイン自身は距離を置いて眺めていることを強調している。
 - (15) David Fitelson, "Stephen Crane's *Maggie* and Darwinism," *American Quarterly*, 16 (1964), 188—189.
 - (16) Frank Bergon, *Stephen Crane's Artistry* (New York: Columbia University Press, 1975), p. 73.
 - (17) メソジスト派の牧師であった父とメソジスト派の牧師の娘であった母を両親に持ったクレインは、両親が彼に禁止したことをことごとく試してみようとした。後年、クレインが父を「偉大な人だが、単純な心の持ち主」と評したことは有名である。
 - (18) Marcus Cunliffe, "Stephen Crane and the American Background of *Maggie*," *American Quarterly*, 7 (1955), 31—44がこの問題について論じている。尚、『都会生活の裏側』については『マギー』のテキストに付けられている "Backgrounds and Sources" を参照した。
 - (19) Stephen Crane: *Letters*, p. 133.
 - (20) Hamlin Garland, "Ibsen as a Dramatist," *Arena*, 2 (1890), 74.
 - (21) Charles C. Walcutt, *American Literary Naturalism, A Divided Stream* (Westport: Greenwood Press, Publishers, 1956), p. 29. ウォルコットは、すべての自然主義的小説は人生の空しさと人間の愚かさを描きだしながらも、その中には作家の希望と信念が表現されているとし、このふたつの緊張によって自然主義小説は

成り立っているとしている。『マギー』の場合、クレインは決定論に則って描きだそうとはしていないが、決定論的現実認識をもつ登場人物を距離をもってアイロニカルに眺め建設的に攻撃することで作家としての希望と信念を表しているといえる。

(昭和62年9月7日受理)